DOR-0122

DAM

ANNI SUGANO DIGITAL 45

SIDE 1

1 *ON THE SUNNY SIDE OF THE STREET*
(J.Mchugh—D.Fields)

2 *LOVE FOR SALE*
(C.Porter)

3 *STARDUST*
(H.Carmichael—M.Parish)

arr. NAT PIERCE

SIDE 2

1 *HERE THERE AND EVERYWHERE*
(P.McCartney—J.Lennon)

2 *TAKE FIVE*
(P.Desmond)

3 *LOVE LETTERS*
(V.Young—E.Heyman)

arr. JOHN ODDO

制作にあたって

日頃は第一家電をご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。皆様の御愛顧のおかげを持ちまして、「マニアを追い越せ大作戦」も20回目をむかえることが出来ました。

20回記念にふさわしいオリジナル録音として業界でもまだ珍しい、デジタル・24チャンネル・マルチ・レコーダーを使用し、現在人気・実力ともトップクラスのジャズシンガー、アンリ菅野のスタンダードジャズ集を製作いたしました。

アンリ菅野の魅力を十分に引出すため、アレンジャーもSIDE 1はカウント・ベイシー楽団に在籍し数々の名アレンジを手がけている、ビッグバンドのアレンジャーとしてアメリカでトップと言えるほどの名アレンジャー、ナット・ピアースがDAMのためにアレンジしたもので、ビッグバンドの迫力とアンリ菅野の声の伸びをうまくマッチさせた内容に仕上がりました。SIDE 2はウディ・ハーマン楽団の新進気鋭のアレンジャー、ジョン・オドで彼はSIDE 2の3曲ともキーボードを担当し、熱演も聴かせてくれています。ジョン・オドのアレンジはフレッシュで、それぞれの楽器の個性をうまくいかした小編成でのアンリ菅野の魅力を引き出した、好アレンジを提供してくれました。（東芝EMI「スイート・メモリー」より3曲）

そしてそれぞれの個性あふれる名アレンジをもりたてて、意欲溢れる演奏をしてくれたのは若さいっぱいのビッグバンド、岡本章生＆ゲイ・スターズの皆さんです。

はじめにふれましたとおり、今回は初のデジタル・マルチ・レコーディングと言う事で、今まで2チャンネル・デジタル・レコーディングは'78年に「PCM vs ダイレクトカッティング」の初録音以後、毎回デジタル録音もしつづけてきましたが、24チャンネル・デジタル・マルチ・レコーディングは東芝EMIとしても初仕事ということで、録音スタッフの皆さんも緊張と興奮のうちに、アンリ菅野も、岡本章生＆ゲイ・スターズも、好アレンジにのりまくった演奏を無事に完了しました。

デジタル録音の特長である、S/N比の良い透明感のあるシャープなサウンドと、マルチ・レコーディングならではの各楽器の迫力ある再生音を十分に楽しめる内容に仕上ったと思います。

又20回記念ということで、表面のアンリ菅野の写真やうら面にはアンリ自身の絵など、ジャケットももりだくさんに仕上げました。レーベルや解説にもカラーのアンリ菅野の写真を使用し、トータル的にも魅力いっぱいのレコードに仕上ったと思います。

最後にこのレコードが会員の皆様の愛聴盤として末長くオーディオ・チェック用としてご使用いただければ幸いです。

DAM推進委員会

録音に立合って

実力派女性ジャズ・ヴォーカルの新しき旗頭として進境著しいアンリ菅野は最近、歌手としてだけでなく、ラジオ番組のDJやテレビの映画解説にと引っ張り凧の多彩で目覚しい活躍を展開している。

そのアンリ菅野の通算6枚目アルバムに当る「スイート・メモリー」のレコーディングは今年の2月22日から3月19日にかけて東芝EMI第3スタジオにおいてソニー社製24チャンネル・デジタル・マルチ・レコーダー3324を使用して行われたが、本レコードのSIDE 1に収められた3曲は、このレコーディングと並行して行われたものである。特にこの3曲は、カウント・ベイシー楽団に在籍し「ホワイト・ベイシー」という異名を持つ名アレンジャー＆ピアニスト、ナット・ピアースがアレンジを担当したもので、市販されていないDAMだけのスペシャル・エディションなのである。又、SIDE 2の3曲は、ウディ・ハーマン楽団の新進気鋭のアレンジャー＆ピアニスト、ジョン・オドのアレンジによるもので、ヒット・アルバム「スイート・メモリー」の中よりピックしたものである。

アンリとナット・ピアースは、前作のサンフランシスコ録音アルバム「ラヴ・スケッチ」ですでに共演しているだけあって、ナットが誠に的を得たごきげんなビッグ・バンド・アレンジをアンリに提供している。又、新鋭のジョン・オドは、メインストリーム・ジャズからフュージョンまでの幅広いアレンジが出来るオールラウンドなアレンジャーで、アンリの新境地を創り出すのに大きな役割を果たしている。この二人のアレンジャー共に正に音の虫といったアーティストで、音楽が飯より好きといったタイプの人間なのである。特に若いジョン・オドはレコーディングの期間中は不眠不休でアレンジの手直しを行ったり、レコーディングに関しても斬新なアイディアを数多く啓示してくれたのである。そのほとばしる情熱にレコーディング・スタッフ一同は感服したのであった。

ジョンの好アレンジと相まって伴奏のメインを務めた岡本章生＆ゲイ・スターズの若さ一杯の意欲溢れる好サポートが、アンリの情感溢れるスケールの大きな好唱を引き出したといっても過言ではないだろう。

今回は当社初のデジタル・マルチ・レコーディングという事もあって録音スタッフ全員が緊張と興奮のうちにレコーディングが進行したが、幸いにもレコーダーが非常に安定しており、アナログ・マルチ・レコーディングとほとんど変わりない、それでいてデジタル・レコーディング特有の粒立ちが良く木目の細いサウンドを収録出来たのはこの上なくラッキーであった。

この様に最高のスタッフと最高のテクノロジーによってレコーディングされた高品質なサウンドを皆様に充分楽しんで頂きたいのと同時に、当社発売のアルバム「スイート・メモリー」も是非お聴き頂きたいと思う次第であります。

東芝EMI洋楽3部　菊地洋一郎

アンリ菅野バイオグラフィー

●アンリの父、梅山勤は日本のジャズ・ヴォーカルの草分的存在といわれる「ブライト・リズム・ボーイズ」のリーダー、母はピアニストという音楽一家に生まれ非常に恵まれた環境に育つ、正にカエルの子はカエル。
●5歳にしてピアノとバレエのレッスンを始める。現在でもモダンバレエのレッスンは続行中。
●14歳のころより絵画に熱中し、武蔵野美大油絵科に入学。在学中は創作活動の他にモダン・ジャズ研究会の一員として大活躍する。武蔵野美大油絵科を卒業。
●単身、ニューヨークに渡り、アメリカン・ライティング＆カルチュア・インスティテュートに学ぶかたわら、モダンバレエをマーサ・グラハムに、ジャズダンスをルイジにそれぞれ師事、ブロードウェイのショーも数多く見学、3年間の在ニューヨーク中知り合った増尾好秋のプロデュースでアルバムを制作（未発表）。
●帰国後、一時ロック・グループ「アンリ＆モーゼズ」のリード・ヴォーカルとして活躍、アルバムを2枚残す。
●ソロ・シンガーとして独立後'78年11月、アルバム「アンリいち」（ETP-80046）を発表し注目を集める。
●'79年4月、鈴木宏昌率いるコルゲン・バンド（現在ザ・プレーヤーズ）の強力なバッキングのもとに制作された「シャイニング・ウェイヴ」（ETJ-85005）を発売、広くジャズ＆ポップス・ファンの間で話題となる。
●'79年6月11日、音楽監督を前田憲男が担当し、特別ゲストにタモリを迎えて記念すべき初めてのコンサートを行ない大好評を博す。
●'79年10月、テレビ朝日系「ミッドナイトショー」月曜日担当1年間の司会者となる。司会者としても人気を獲得。
●'80年1月、西日本放送「ミッドナイト・ストリート」月曜～金曜日担当D.J.。
●'80年2月5日、シングル「ミスター・プリンター」発売。
●'80年4月20日、アルバム「ジャスト・グルーヴィン」（EWS-81314）発売。
●'80年5月9日、第2回コンサート開催。ゲスト世良譲。
●'80年6月5日、シングル「復活の日のテーマ」発売。
●'80年10月19日、韓国ソウル音楽祭にゲストとして出演。
●'81年3月、L.A.キャピトル・スタジオにてニュー・アルバム「ショウケース」録音。
●'81年5月21日、ニュー・アルバム「ショウケース」（EWJ-90004）発売。
●'81年6月7日、第3回コンサート開催。ゲスト奥村公延。
●'81年9月11日、TBS「ミッドナイト・ジャパン・ジャズ・フェスティバル」出演。
●'81年10月より、NHK・FM「軽音楽をあなたに」水曜日担当のD.Jとなる。選曲及び構成も自分で担当。
●'81年10月3日、NHKホールにての昭和56年度文化庁芸術祭特別公演「ミュージック・フェスティバル'81～JUST JAZZ～」に出演。伴奏は東京フィルハーモニー交響楽団、クラシックとジャズの豪華な共演となる。
●'82年1月、サンフランシスコにて初のジャズ・ヴォーカル・アルバム「ラヴ・スケッチ」をコンコード・オールスターズのバッキングで制作。
●'82年4月21日、アルバム「ラヴ・スケッチ」（ICJ-90010）を発売。
●'82年7月16日、17日。第4回コンサート開催（芝ABCホール）。
●'82年8月6日、第14回コンコード・ジャズ・フェスティバルにゲスト出演、大好評を博す。
●'82年12月、テレビ朝日「ミッドナイト・シアター」（毎土曜日）の解説者となる。
●'83年2月～3月、アルバム「スイート・メモリー」（アレンジ：ジョン・オド）を制作。
●'83年4月22日～27日、第1回アンリ菅野・アドリブ陶芸展を開催（渋谷東急デパート本店特別会場）。
●'83年5月21日、最新アルバム「スイート・メモリー」（EWJ-90018）発売。
●'83年5月28日、第5回アンリ菅野"スイート・メモリー"コンサート開催。（ヤクルト・ホール）ゲスト原信夫とシャープ＆フラッツ。

ジョン・オド（アレンジ）について

●アメリカ、ニューヨーク州ブルックリン生まれ、ニューヨーク育ち、ニューヨーク市立大学クイーンズ校卒業、音楽学士、ロチェスター・イーストマン音楽学校卒業。音楽修士（マスター・オブ・ミュージック）。
●1978～80年、ニューヨーク州ビンガムトン、B.C.ポップ・オーケストラの作曲、編曲を担当。
●1980年、ウディ・ハーマン・ビッグ・バンドのキーボード・プレーヤー、アレンジャーとして活躍中。
●1982年9月、オーレックス・ジャズ・フェスティバル'82にウディ・ハーマン・ビッグ・バンドの一員として来日公演を行う。
●1982年12月、スエーデン王室の為にストックホルムでコンサートを行う。
●彼が編曲とキーボードを担当したウディ・ハーマン・ビッグ・バンドのアルバム「コンコード・ライヴ」（EWJ-80237）は今年度のグラミー賞、ビッグ・バンド部門にノミネートされた。
●現在ハーマン・バンドのコンサート・マスターとして活躍する他、本アルバムのアレンジやフィーリー・ジョー・ジョーンズ（dms）のアルバム「ダメロニア」のアレンジ等も担当している。
●4ビートから16ビート（メインストリーム・ジャズからフュージョン・ミュージック）までアレンジ＆プレイできる新進気鋭のアーティストとして幅広い活躍を展開中。

ナット・ピアース（アレンジ）について

●1925年7月アメリカ合衆国マサチューセッツ生まれ。1943年デビュー。
●1949～51年、バンド・マスターとして活躍。
●1951～55年、ウディ・ハーマン楽団のピアニスト兼アレンジャー。この頃より頭角を表わし、名実共に認められる。
●1957～59年、また自分のバンドを再結成したが自ら解散し、現在のようにフリーランサーとなる。この時期よりビッグ・バンドのアレンジを多く書くようになる。
●来日は1970、77、81年。その中でも1981年はコンコード・オールスターズ・レコーディングのため来日。
●このアルバムのDAMバージョンはすべてアンリのためにアレンジした作品。

曲目解説と聴きどころ

一般レコードでは出来ないような斬新な企画で、いつもぼくたちを楽しませてくれているこのシリーズも今回で20回めを迎えるという。

10回記念の時には、デジタルVSダイレクト、という意欲的な企画もあったし、厚手プレス、45回転など音質向上のための努力にも怠りがなく常にオーディオ・フリークの心をとらえてきたように思う。中には、多少アマチュアライクな面も見受けられたが、それこそが採算を優先して作られるレコード会社の作とは違うところであり、大きな魅力であったことは間違いない。

今回は、アンリ菅野の最新アルバム“スイート・メモリー”からの3曲に加え、このアルバムのために新たに録られた3曲(Side 1)が収められているが、どちらもデジタル・マルチ・レコーダーを使用し、マスタリングを含めて完全なデジタル録音という点に注目したい。一般に、こうした作品では、Side 1と2の統一感がとれなかったり、サウンドの良さのみを強調するようになったりしがちだが、本アルバムは、このまま市販しても良いようなまとまりをみせている。

深まりゆく秋の夜、しっとりとした女性ヴォーカルに耳を傾けるというのは、ジャズ&オーディオ・ファンにとって、至福の時といえるだろう。

今後も、30回、50回と、こうした素敵な企画が続くことを願っているのは、ぼくだけではないはずだ。

ON THE SUNNY SIDE OF THE STREET

ドロシー・フィールズ作詞、ジミー・マクヒュー作曲。1930年の“インターナショナル・レビュー”というショーのために書かれた作品で、主演のハリー・リッチマンが歌い好評を博し、それ以後も多くのアーティストがとり上げ、もっともポピュラーなスタンダード曲の一つとなった。

“明るい表通りで”という邦題がつけられているが歌詞の内容も、陽の当たる明るい表通りを歩けば大富豪になった気分、というような庶民の心情を表わしている。いかにもアメリカ的な名曲といえるだろう。

■聴きどころ■

ダイナミックなブラスのイントロに続いて快くスイングしたアンリのヴォーカルが現われる。正確なリズムをキープするトップシンバルの明快なアタック音とアコースティックベースのしっかりとした音像はデジタル録音の強味といえるだろう。また、ブラスのリフのスピード感、管の一本一本の響きも明晰に出してしまうような定位の確かさも見逃せないところだ。

LOVE FOR SALE

数多くの名曲を残したコール・ポーターの傑作のひとつ。1930年の12月8日に初演されてから168回も上演されたというブロードウェイ・ミュージカル“ザ・ニューヨーカーズ”のナンバーで、キャサリン・クロフォード、ジェーン・シェイファーらが歌った。

ちょっと聴くと楽しげな恋の歌のようだが、実は街頭に立って男を誘い、ひとときの恋を売る哀しい女の歌。かなりストレートな歌詞であるため当時のラジオでは放送禁止になったという。

■聴きどころ■

軽快なボサノバ調のリズムで始まるが、冒頭で低いチューニングのフロアタムのショットにまず驚かされる。ヘッドの余韻だけでなく空気の震えまでが判るほどローエンドまでしっかりと入っている。これが、どこまで再現できるかでFレンジ・Dレンジのチェックができてしまうだろう。

ブラスの輝き、アンリの表情豊かなヴォーカルを魅力たっぷりに捉えた好録音といえるだろう。途中のドラムソロも聴きどころだ。

STARDUST

1981年12月27日、82歳で世を去ったホーギー・カーマイケルの最高傑作でスタンダード中のスタンダードと呼べるほどポピュラーになった名曲。1927年の夏の夜、学生時代の生活や失った恋人のことを思いつつ、星空を仰いだ時に浮んだメロディーをまとめ上げたのだと言う。タイトルはこの曲を聴いた学友がつけたというが、この時は作詞されなかった。

しかし、1930年にビクター・ヤングのアレンジによるレコードが好評を博し、ミッチェル・パリッシュが1931年に発表した歌詞によりビング・クロスビーとルイ・アームストロングのレコードのヒットによって一躍人気曲となった。

この曲をこれまで何人の人が耳にし、また一体何人のアーティストがとり上げただろう。多くの名演が残されている。

■聴きどころ■

ピアノのイントロに続いて、アンリがしっとりとバースから唱い始める。

イントロのピアノは低音弦のシングルトーンで始まるが、この余韻が高域のフレーズに少しもマスクされずにクリアーに再現してしまうのはデジタル録音ならではだ。と同時に、この辺りでシステム全体の分解能がチェックできるだろう。全篇にわたり情感たっぷりと唱い上げるという印象だが、途中でオーケストラ全体が鳴り響く箇所などあり、ただのスロー・バラードで終らないところがオーディオ的に面白いところだ。

HERE THERE AND EVERYWHERE

ご存知ビートルズのポール・マッカートニー、ジョン・レノンのコンビによる美しいバラッド。「リボルバー」に収められていた原曲は、ポール・マッカートニーのダブル・レコーディングによる甘いヴォーカルが印象的だった。

■聴きどころ■

アコースティック・ギターの刻む軽快なリズムに乗って、ゆったりとしたヴォーカルが聴けるが、キックドラムやエレクトリック・ベースの低音は重量感とマッスが十分にあり、音楽が軽く流れていってしまうことはない。

ストリングスのハーモニーも美しく、トライアングルをはじめとするパーカッションの粒立ちも良い。ストリングスが荒れていたり、トライアングルの余韻が濁って聴こえるようだとシステムに問題があるのでは……。

間奏のアコースティック・ギター・ソロもピュアな音色でスラーやピッキングの表情が生々しい。

TAKE FIVE

デイヴ・ブルーベック・カルテットのアルト・サックス奏者として知られる故ポール・デスモンド作曲の大ヒット・ナンバー。5/4拍子という変拍子であるにもかかわらず、覚えやすいメロディと快いスイング感を湛えている。1957年7月にレコーディングされたデイヴ・ブルーベック・カルテットのアルバムからシングル・カットされ、ビルボード誌のチャートでも上位にランクされた。

タイトルは“5分間休憩”という意味だが、5拍子のことも指している。後にブルーベック夫人の詞により、多くのヴォーカリストがとり上げることとなった。

■聴きどころ■

ピアノだけで例の5拍子のリズムを刻み始め途中からドラムスとベースが入ってくるが、このベースは相当な超低音まで含んでいる。また、サックス・ソロ直前のリフにはキックドラムの強烈な低音のエネルギーが入っている。スピーカーの低域のF特のチェックとカートリッジやアームのトレース能力を知ることができる。サックスのソロも透明感のある音で、故ポール・デスモンドのプレイを彷彿とさせるところがある。

LOVE LETTERS

1945年のパラマウント映画“ラブ・レター”のために書かれた作品で、ヴィクター・ヤングが作曲、エドワード・ヘイマンが作詞した。

甘いラブ・ソングで、ヴォーカルの名唱は数多く、ヴォーカル・ファンなら必ず聴いたことがあると言っても良いほどポピュラーなナンバーとなっている。

■聴きどころ■

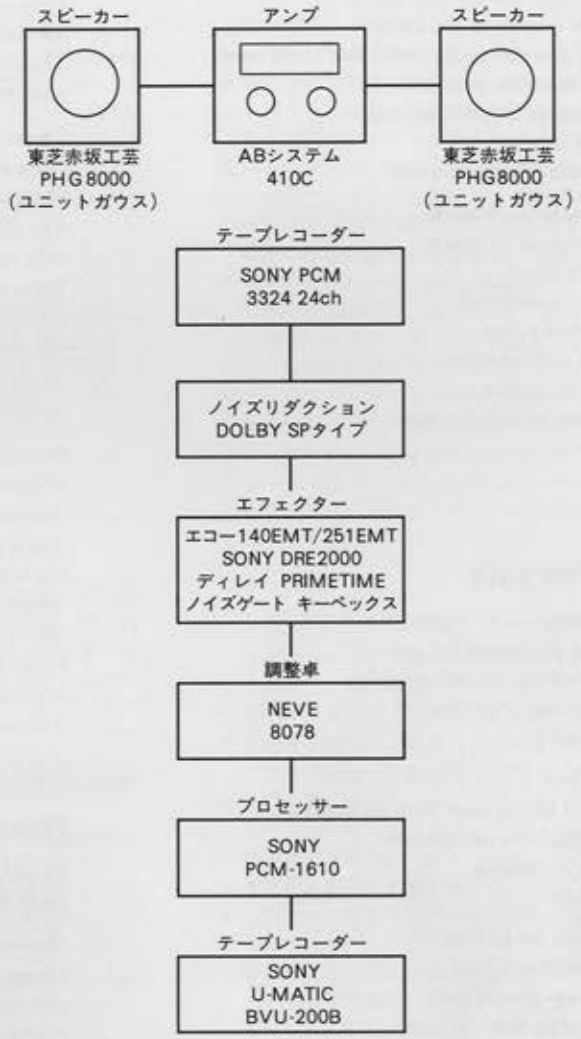
コード(和音)でリズムを刻む生ギターだけをバックにアンリが情感たっぷりに1コーラスを唱い上げた後、リズム・セクションが加わってくるが、ギターのコードやエコーの鮮度の高さが印象に残る。また、堅実なウォーキング・ラインを聴かせるストリング・ベースの超低音にも注目したい。アンリのヴォーカルにからむクラリネットのオブリガートのまろやかな響き、ブラスセクションのハーモニーの厚みや拡がりも申し分ない。

〈小林 貢〉

マイク・セッティング

管楽器		ノイマン M-269c
パーカッション		ゼンハイザー MD-421
ドラム	タム	ゼンハイザー MD-421
	ハイハット	AKG D-224
	トップ	ノイマン M-269c
	キック	ゼンハイザー MD-421
	スネアー	ゼンハイザー MD-421
ピアノ		ノイマン U-89i　AKG C-414EB
EG		ライン カントリーマン U-89i
WB		ソニー C-55AC　ノイマン M-269c
ボーカル		ノイマン M-269c
弦		ノイマン M-269c
AG		ノイマン M-269c

レコーディング・トラックダウン・ブロックダイアグラム



バック レコーディング S.58.2.22～25
アンリ ボーカル・レコーディング S.58.3.7～10
トラックダウン S.58.3.13～15

●岡本章生とゲイ・スターズ

岡本 章生 (LEADER)	Akio Okamoto	
中込 勝 (CONCERT MASTER)	Masaru Nakagome	ALTO SAX
貫田 重夫	Shigeo Nukita	TENOR SAX
今野 菊治	Kikuji Konno	ALTO SAX
上里 稔	Minoru Uesato	TENOR SAX
白子 正夫	Masao Shirako	BARITONE SAX
横山 均	Hitoshi Yokoyama	TRUMPET
佐々木秀人	Hideto Sasaki	TRUMPET
斉尾 知一	Tomokazu Saio	TRUMPET
向出 聡	Satoshi Mukaide	TRUMPET
松原 純夫	Sumio Matsubara	TROMBONE
永石 郁夫	Ikuo Nagaishi	TROMBONE
松林 辰郎	Tatsuro Matsubayashi	TROMBONE
小山 政弘	Masahiro Koyama	BASS TROMBONE
阿野 次男	Tsuguo Ano	DRUMS
金子 純	Jun Kaneko	BASS
木村 博紀	Hiroki Kimura	PIANO
岡田 準	Jun Okada	GUITAR
納見 義久	Yoshihisa Nohmi	L.P.C.
幾見 雅博	Masahiro Ikumi	G.G.

●(弦)ベスト・アンサンブル

DAMハイクォリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に併い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここに来て厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウ・ハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作り的なプロセスを経て制作されたものがDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシィーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクォリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

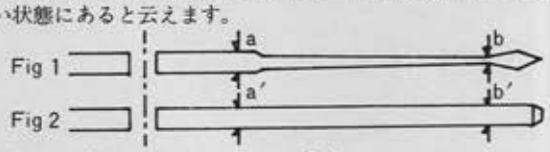


Fig 1 一般のレコード　a−b=0.6〔mm〕
Fig 2 新フラットレコード(ディスク)　a′−b′=0.2〔mm〕

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L−R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が充分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとタールテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比		30%up
厚さ比	最厚部	15%up
	最薄部	65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の"DAM 45"では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P−P)250μ〜280μ、〔L−R〕、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。

このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティーの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

❖30センチ45回転レコードの取扱いについて❖

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃〜20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクォリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

第20回カートリッジ頒布会によせて

オーディオ・チェック・レコードとして企画された「DAM45」シリーズも、8年を迎えるに至ったことは、私共制作スタッフとして感無量であると共に、DAM推進委員の皆様の御努力には頭が下がる思いと、感謝に堪えません。

このDAM45シリーズは、ディスク・レコードというきびしい物理的制約の中で、その一作毎に、より完成された音楽性の追求と、音の限界に挑戦し、トータル・サウンドの可能性を求めて来た経過が有り、私共技術屋として、それを自負するものです。

シリーズの中で、企画される毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の新技術を導入し、そのたびに製造ノウハウを確立して来ました。45回転レコードを基本ポリシィーとして、ハイレベル・カッティング、ダイレクト・カッティング、マスター・プレス、ハーフ・カッティングは勿論の事、クォーツ・ロック・モーター、ダイヤモンド・ヒートスタイラス、又厚手重量のフラット・ディスクの採用を一早く適応させ、最近では、ビデオ・ディスク、コンパクト・ディスクの周辺技術を導入し、よりハイディンシティ化に努めています。

一作毎に新技術を導入しテクニックを駆使して完成させる為に、オリジナル・マスター・テープがダメになる程のカット・アンド・トライを行い、試聴室では山積にされたテスト盤のヒヤリング、測定の繰り返しテストの連続！スタッフ間の口数が少なくなり、シラケる場面も数々有りました。しかし最高の状態で完成させた時の充実感とチャレンジした後の満足感を得た時の感激も又ひとしおです。この様にDAM45シリーズは、当社ソフト技術の流れを代表する重要なサンプルでもあります。

今後益々充実した内容で永く継続される事を願い、又音楽に対する姿勢を多いに賛辞してやみません。

東芝EMI音響技術部　原 清介

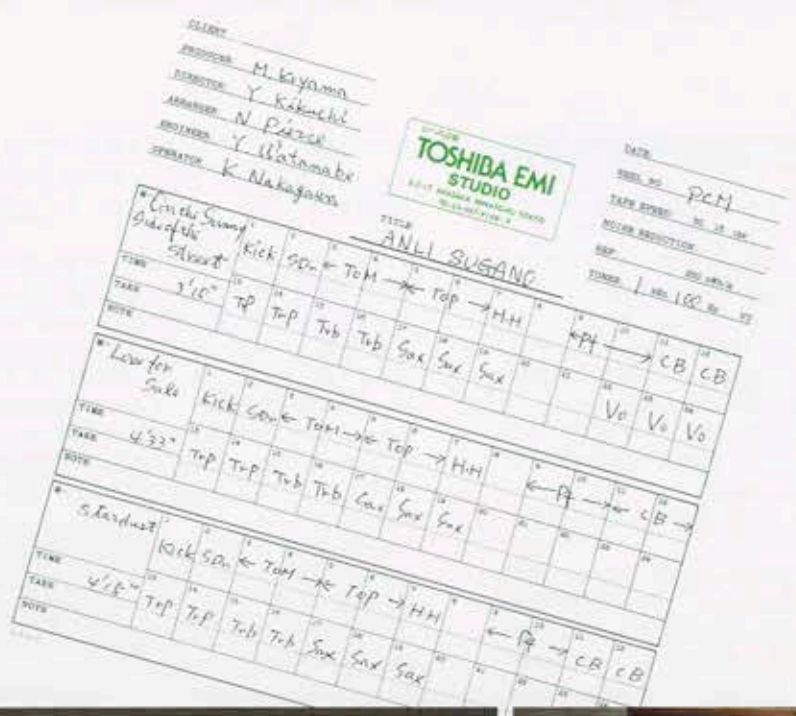
●カッティング・データ

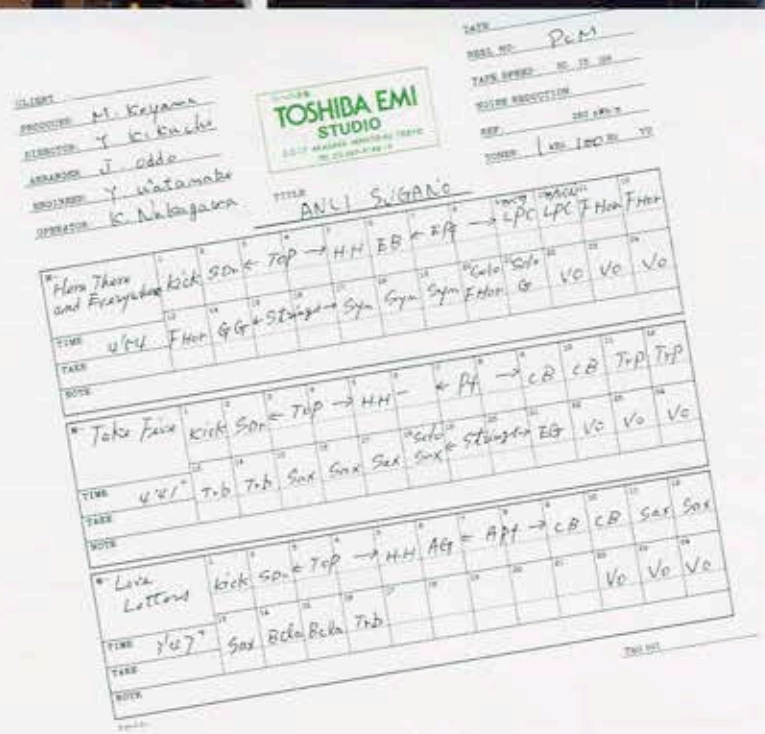
Cutting : TOSHIBA-EMI #3ED AKASAKA
Cutting Date : SEPT. 16. 1983
Digital Recorder : V.T.R. SONY BVU-200B
PCM Processer : SONY PCM-1610
Drive Amp. : NEUMANN SAL-74
Cutting Lathe : NEUMANN VMS-80
Cutting Head : NEUMANN SX-74
Diamond Cutting Stylus
Non Limitter
Non Equalizer

●スタッフ

プロデューサー	小山　正敏
ディレクター	菊地洋一郎
ミクサー	渡部　喜久
サウンド・オペレーター	中川　幸衛
カッティング・エンジニア	竹内　昭五
フォトグラファー	波多　健二
デザイナー	板垣　騏
メンテナンサー	伊藤　勲
コ・オペレイション	時
録音	東芝EMI第3スタジオ

企画・制作	第一家庭電器DAM
制作・製造	東芝EMI





私の青春の一枚 / ジャケット油絵について

いつも何かを追いかけているのが私らしいのですが、この油絵を描いたのは22、3歳で、もちろんジャズをうたっていました。どちらを選ぼうか迷っていたような気がします。暗の中を手さぐりで突き進んでいたけれど、ひたすら一生懸命だったけど、後に何の形も残らずそれでもめげずに、絵を描き唄をうたって精一杯という日々。

それに比べると、今は少しずつ確実に全てが自分の物になっているという手ごたえがあって、楽しい毎日です。

求めて努力しても形をなさないのが青春だったら、まさに青春の一枚(一ページ)というところですね。

アンリ菅野